The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フロイトの神経失調論に見る啓蒙と情動 : 「「文化的」性道徳と現代の神経失調」を中心に
Author(s)	福田, 覚
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2010, 10, p. 13-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77699
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フロイトの神経失調論に見る啓蒙と情動

― 「「文化的」性道徳と現代の神経失調」を中心に ―

福　田　　覚

前号では、「情動論から捉え返した詩学史記述の可能性」を論題として、情動論の振幅というものを考察した[1]。情動や情念に対する姿勢は学問によっても異なるが、大きく分けて、情動を喚起する、情動を伝播するなど、明確な目的のために情動を積極的に利用しようという形の修辞学の系譜と、情動の実際を捉え、理論に回収し、それを制御したり、その上で何らかの基盤として利用したりしようという形の医学や哲学の系譜とに大別できる、という風に整理を行った。概括的に述べれば、巧みに情動を呼び起こすことが必要となる前者に対し、災いをもたらす情念を抑え込むことを課題と抱えていたのが後者と言える。

本稿は、前号の付論として位置付けられる。ドイツ啓蒙主義そのものからは離れるが、離れた地点から光を照射する参照点として、精神分析の欲動論、情動論に着目する。啓蒙主義詩学の「感情移入」や「カタルシス」といった概念は、精神分析の「転移」や「昇華」といった概念と親和性があるように思われる。そしてまた、厄介な情動を抑圧した後にそれが回帰して災いをもたらすケースで、転移を利用して治癒を試みたり、昇華という回路を利用して情動の建設的な解放を行う事態を見て取ったりする精神分析の立論は、情動を抑え込む形の情動論と情動を利用する形の情動論とを接続する視点を有している可能性がある。

本稿で中心的に取り上げるのは、「「文化的」性道徳と現代の神経失調」[2]というフロイトの初期の論文である。1908 年に雑誌に発表されたのが初出である。この論考で論じられた、文化的な抑圧が神経面の不調を産み出すという精神分析の理論枠組みそのものが「啓蒙」の捉え方に関わってくる。フロイトの論考は、第一義的には性道徳を問題にしているが、それを範型とした道徳一般の問題として捉え直すことのできるものである。

1　第二の自然と化した文化、その文化がもたらす損害

1-1　エーレンフェルスの問題提起

フロイトのこの論考は、エーレンフェルス[3]が『性倫理学』[4]（1907 年）において性道徳を自然なものと文化的なものとに分けたことから説き起こされている。

「最近公刊された『性倫理学』のなかで、フォン・エーレンフェルスは、「自然な」性道徳と「文化的な」性道徳の区別について長々と論じている。この書で自然な性道徳として理解されているのは、その性道徳が支配すると、人間の種族が持続的に健康や生活能力を保持できる、そういう性道徳である。文化的性道徳として理解されているのは、その性道徳を守れば、人間がむしろ集中的かつ生産的な文化労働へと駆り立てられる、そういう性道徳である。この対立は、ある民族が資質的に所有しているものと文化的に所有しているものという対比によって説明するのがもっともよい、と言われている。」(S.143) [5]

エーレンフェルスの『性倫理学』は全四章の構成であるが、ここでは第１章「自然な性道徳と文化的性道徳」の冒頭の文章が紹介されている。文化が言わば第二の自然となって人間の環境を形成し、それ自体が道徳を課すので、自然が課す道徳と文化が課す道徳を区別しようとする試みと受け止めることができる[6]。

フロイトは、エーレンフェルスのこうした区別を「重要な思考過程」だと評しつつ、先を急いで、自身の論考へと接続するのに必要な点を特に強調しようとする。それは現代の性道徳のマイナスの側面である。フロイトはさらに、そこに一つの推測を継ぎ足している。文化的性道徳の支配下では、個々の人間の健康と生活能力が侵害され、最終的にそれが最高度にまで高じれば、結局は文化的な目標もまた危険に陥るのではないか、という推測である。

エーレンフェルス自身が認めるマイナスの側面は、一夫一婦制のために男性の間に生存競争がなくなったという点である。例えば、エーレンフェルスは、第２章「現代ヨーロッパの性道徳」の第３節「一般的な害」の冒頭でこう述べている。

「我々の性道徳によって促進された文化の花は、決して健康的なものではなく、花が芽生えてくる根茎を消耗し尽くす温室の花である。一夫一婦制の性秩序が、それによって支配されている民族という幹の健康を、何世代もしてから初めて分かるほどゆっくりと、しかし確実かつ不可避的に掘り崩す。しかもこの性秩序は、道徳的な意識によって改善に向けて進歩していくことがいま最も必要とされているところで、つまり、真実愛、誠実さ、人間性という領域で、社会の平均的な道徳水準の発展に一定の枠をはめてしまうのである。」[7]

「文化の花」は長い目で見ればゆっくりと弱っていく「温室の花」で、文化的な道徳がそうした事態をもたらすと理解されている[8]。エーレンフェルスは、文化的な道徳の害は、文化的な領域よりも資質的な領域に現れると見ているようである。

「しかし一夫一婦制の倫理秩序によるこうした文化的な害はすべて、それがどれほど重く我々の民族道徳に付きまとっていたとしても、一夫一婦制の悪影響が人間の淘汰に引き起こす資質的な害に比べたら依然として些細で危険のないものと言える。／一夫一婦制は［・・］性的淘汰における雄性的要素を完全に麻痺させる。婚姻外の子づくりは、ここでは例外としてはあり得ても、例外がなければならないわけでもなく、文化国家ではあまりに少数で、全体の資質に決定的な影響を与えることなどできない。」[9]

エーレンフェルスは、生物学的な「生存競争」という観点から、子孫のなかの一部の優れたもののみが排他的な生殖へと到る「淘汰」を意義あるものとして捉えており、劣ったものが生殖可能な年齢に達する前に死を迎えることで世代継承から排除される淘汰を「生存淘汰（vitale Auslese)」、劣ったものが交尾（性交）から完全にあるいは概ね排除されることで世代継承から排除される淘汰を「性的淘汰（sexuale Auslese)」と呼んでいる。雄性的な生殖能力の過剰を「雄性的要素（vilirer Faktor)」と呼び、種の保存のための淘汰には不可欠なものと考えている。動物界で一般的な交尾のあり方が一夫多妻の形式であることの理由もその点にあり、一夫一婦の形式では淘汰の雄性的要素が麻痺してしまうと見る。

「しかし生存淘汰は、文化的民族においては、人道と衛生によって最小限に縮小されている。そのため、我々の社会では、選択の審級が十分に機能していない。選択が機能すれば、資質の上で活力みなぎるものが不十分なものから分離されるし、何世代も経過すると健康的な標準型から逸れた様々な偏倚が生じてくるが、それらのうち、脇に伸び出た価値の低い若枝の大多数が、芽が出るとともにすぐに切り取られる。」[10]

こうしたエーレンフェルスの考え方を受けて、フロイトは次のように議論を整理している。

「実際にまた、フォン・エーレンフェルスは、私たちの現代ヨーロッパ社会を支配している性道徳に対して、そこに責任を負わせざるを得ない一連の損害があることを立証している。そうして、文化の促進に対するこの性道徳の高い適性を十分に評価しながらも、この性道徳を改善すべきものと断罪するに到っている。私たちを支配している文化的性道徳にとって特徴的なのは、女性の要求を男性の性生活に転用し、一夫一婦制の性交渉を例外とした上で、他のどのような性交渉も禁じていることだという。もっともそのような場合、両性の自然な差異を考慮に入れるなら、男性の違反を罰する厳格さを減じて、事実上二重道徳を男性に許容しなければならなくなる、と言われる。しかし、こうした二重道徳へと進んだ社会は、「真実愛、誠実さ、人間性」[11]という点で、一定の狭く限定された範囲以上に進歩することができず、その成員を真実の隠蔽、言い繕い、自己欺瞞や他者に対する欺きへと向かわせてしまう[12]。文化的性道徳がさらに有害に作用するのは、一夫一婦制の賛美を通じて、雄性淘汰という要素を麻痺させてしまう点である。文

化的諸民族における生存淘汰は、人道と衛生によって最小限に抑えられるので、雄性淘汰という要素の影響によってしか資質の改善が得られないとされるのだが、その要素を麻痺させてしまうのである[13]。」(S.144)

1-2　神経失調をめぐる議論

フロイトがエーレンフェルスの文化的性道徳の概念に着目したのは、それが当時の社会に急速に広がっていた神経面の不調を説明すると考えたからである。人間にとって第二の自然と化した文化がもたらす害として、神経失調がある。

「いま医者は、文化的性道徳に責めを負わせるべき様々な損害に、一つ抜けているものがあったと感じている。その損害の意味について、ここで詳しく論じることにしたい。私が考えているのは、文化的性道徳に起因して、現代に、つまり私たちの現在の社会に急速に広がっている神経失調の助長のことである。時折、神経失調の病になった患者自身が次のように述べて、病気の要因として観察される、資質と文化的要求との間の齟齬に医者の注意を向けさせることがある。「私の家族は全員神経失調になったことがあります。その素性からして可能なもの以上になろうとしたためです。」医者もまた、非常にしばしば、次のようなことに気がついて考えさせられてしまう。単調かつ健全な田舎の環境の出身で、粗野ではあるが力をもった一族の子孫という人が、侵略者のようにして大都会に出てきて、自分の子供たちに短期間で文化的に高い水準にまで上り詰めることを求めると、まさにそういう父祖の子孫に限って神経失調になっているのである。」(S.144f.)

ここで「神経失調」と訳した語は Nervosität である。スタンダード・エディションの英訳では nervous illness と訳されている。従来「神経質」と訳されることもあったが、フロイトが本論文で用いている Nervosität の語は、日本語の日常的な言語使用における「神経質」という言葉とは違い、病理学の領域に軸足を置いた言葉という観がある。こうした点を考慮して、また、森田正馬の言う「神経質」との違いも考慮に含め入れて、ここでは、日常的な意味に誤解されやすい「神経質」という訳語を避けている。後述するように、フロイトの場合、Nervosität の語は、病気の機制までを視野に入れた疾病区分内には位置づけをもたず、それ以前の症状の観察というレベルに焦点化したした言葉として用いられているように見受けられる。そうした点から、「神経質症」といった疾病区分としての響きをもつ訳語も不適当と言える。

この「神経失調」の増大は、この時代にあって先端的な論件であった。フロイトは、増大する神経失調と現代の文化的生活との関連についての神経科医たちの発言を抜粋している。フロイトが「優れた観察者」としているのは、エルプ、ビンスヴァンガー、クラフト

＝エービングである。

ヴィルヘルム・エルプ（1840－1921）は、医師であり、神経学者であった。電気療法の創始者の一人で、進行性筋ジストロフィーやエルプ＝デュシェンヌ麻痺など神経学上の病像を数多く発見した。脊髄癆と梅毒の関連を、それが実証される十四年前に最初に主張して名声を高めた。フロイトが引用している『現代の増大する神経失調について』[14]という1893年11月22日の学術講演も注目を集めた。この講演では「神経系とその罹病」がテーマになっている。エルプは、「神経失調」をめぐる意見は様々で、非常に多様な概念が結び付けられているとしながらも、その他の点では健康そうに見える人の神経系の過敏さの高まりを示唆するものはすべてそこに含め入れてよい、としている。そしてそれらの頻度が非常に高まった時に、神経失調の責を時代に帰すことができると述べている[15]。神経失調をめぐる議論でとりわけ重要になるのが神経衰弱で、神経失調の多さが今日の時代固有の病気を表していると言われる時、まず最初に念頭にあるのが神経衰弱である[16]。フロイトは、以下の３つの箇所を引用している。

「最初に立てた問いはこういうことになります。皆様にお示しした神経失調の諸原因が私たちの現代の生活において非常に増えてきたのではないか、そのためそれらが神経失調の著しい増加を説明してくれるのではないか、ということです。――そして、おそらくこの問いには、迷わずそうだと答えてよいでしょう。私たちの現代の生活やその形態を一瞥すれば分かることです。」（S.145）[17]

「一連の一般的事実だけですでに、このことは疑う余地なく明らかになります。近代の異常な成果、あらゆる分野での発見と発明、競争の増大に直面しながらの進歩の維持というのは、多大な精神的活動があってはじめて獲得され、またそれがあってはじめて維持できるものなのです。生存競争における個々人の能力への要求は著しく高まり、個々人は、すべての精神的諸力を動員しないことには、そうした要求を満たせません。同時に、個々人の欲求、あらゆる領域で生活を楽しむことへの要求が増大し、聞いたことのないような贅沢が、以前はそうしたものとは完全に無縁だった住民階層にまで広がりました。無信仰、不満足、欲深さが国民の幅広い範囲で高まりました。計り知れないところまで増大した交通や、世界中に広がる電信電話網によって、商業活動はすっかり変容しました。すべては慌ただしさと刺激のなかで進みます。夜は旅行のために、昼は仕事のために使われます。「保養旅行」までもが、神経系にとって骨の折れるものとなります。規模の大きな政治的・産業的・財政的危機は、以前よりもはるかに広い住民社会に騒ぎをもたらします。政治生活への参加は、まったく一般的なものとなりました。政治的・宗教的・社会的な闘争、政党活動、選挙アジテーション、際限なく昂じる団体活動が、頭を熱くし、精神に対して常に新しい緊張を強要し、保養・睡眠・休息のための時間を奪います。大都市での生活は常に、より洗練され、より落ち着かないものになっていき

ました。疲弊した神経は、増幅された刺激、強い味付けの享楽に癒しを求め、それによってますます疲労します。現代文学が主として取り組むのは、あらゆる情念を掻き立て、感性と享楽欲を昂進させ、あらゆる倫理的原則とあらゆる理想の軽視を押し進める、極めて由々しき諸問題です。現代文学は読者の精神の前に病的な人物像を持ち出し、精神病質や性の問題、革命の問題、その他の問題を持ち出してきます。私たちの耳は、大量に与えられたどぎつくて騒々しい音楽に興奮させられ、過度に刺激されます。劇場は、あらゆる感覚をその刺激的なパフォーマンスで虜にします。造形芸術までもが、不快なもの、醜いもの、刺激的なものを偏愛するようになり、現実世界が見せつける非常におぞましいことでさえ、不快なリアリティのまま私たちの目に触れさせて憚りません。」(S.145f.) [18]

「ここまでの一般的な描写においてすでに、現代の私たちの文化的発展が孕む一連の危険が示されています。こうした描写は、個々の点にさらに幾つかの特徴を加えることによって、より完全なものとなるでしょう。」(S.147) [19]

現代社会において、文化的発展が裏目に出て神経失調をもたらしていることが、具体的に叙述されている。もっとも、文化的な性道徳がパートナー選びにおける自然な競争を抑制したことが長期的に見ると人類を資質的に弱めるとするエーレンフェルスの主張とは違い、エルプは、人類が進歩していくための生産面での競争の増大が神経をおかしくしていると言っていて、「競争」という契機の組み込まれ方は、両者の立論では異なっている。

フロイトが次に引用するのは、ビンスヴァンガーである。オットー・ビンスヴァンガー(1852－1929)は、スイス人の精神科医で[20]、主たる研究対象は神経衰弱、癲癇、ヒステリーであった。『癲癇』(1899年)、『ヒステリー』(1904年)などの著書がある。フロイトが引用している『神経衰弱の病理学と治療法』[21](1896年)は講義録で、引用箇所は第2講義「一般的な病因」の末尾の部分である。

「特に神経衰弱はきわめて現代的な病気だと言われてきた。この病気に見通しのいい説明を最初に与えたのはベアードの功績だが、ベアードは、アメリカの地で特別に生じた新しい神経病を発見したと考えていた。こうした想定はもちろん誤ったものである。けれども、最初にアメリカの医師がこの病気特有の性質を豊かな経験を土台として把握し確認できたという事実が、現代の生活がこの病気に対して示す緊密な関係を明らかにしている。現代の生活は、金銭や財産を大急ぎで追い求めて抑制が効かず、技術的な分野で途方もない進歩があった。この進歩によって、交通の面で見た生活は、時間的にも空間的にもすべての障害物が実体のないものとなった。」(S.147) [22]

ビンスヴァンガーの引用のなかでさらに言及されているアメリカの神経学者G・M・ベア

ード（1839－1883）には、『アメリカ人の神経質—その原因と結果』（1881 年）、『性的神経衰弱（神経の消耗）—その衛生、原因、症状、治療』（1884 年）といった著作がある。ベアードについてフロイトは、神経衰弱についての初期の議論のなかで何度かベアードの著作に言及している[23]。

フロイトによって最後に引用されるリヒャルト・フォン・クラフト＝エービング（1840－1902）は、精神科医で、犯罪心理学者、法廷精神科医、性心理学者として有名であった。「強迫観念」や「朦朧状態」といった概念を精神医学の専門用語として導入した人物であり、「サディズム」、「マゾヒズム」の命名者でもある。とりわけ『性的精神病質』（1886 年）の著作が知られている。フロイトがここで参照している「神経失調と神経衰弱状態」[24]は、冒頭の 30 ページが「神経失調」についてで、残りが「神経衰弱状態」について書かれたものである。フロイトが引いているのは、「神経失調」の第２章「神経失調の病因論」・第１節「社会学的要因あるいは一般素因」の冒頭部分である。

「無数の文化的人間の生き方には、今日あまたの非健康的契機が見られる。神経失調が致命的な形で広がっていることは、そこから容易に理解される。というのも、これらの有害な諸契機は、真っ先にそして大部分が脳に作用するからである。文化国家の政治的・社会的状況、とりわけ商業・工業・農業の状況が、まさしく過去数十年の間に様々に変化し、職業や市民の地位や財産を激しく変えてしまった。しかも、神経系を犠牲にしてである。神経系は、増大する社会的・経済的要求に対して、幾重にも不十分な休養のなか、一層の気力を注ぎ込むことで応えていかなければならないのである。」（S.147）[25]

人間にとって第二の自然と化した文化は、本来は人を幸福にするためにつくられたものであったにもかかわらず、それが逆に損害をもたらしているというこれらの指摘は、神がつくったはずの現実世界が必ずしも人間を幸福にしていないということが指摘された 18 世紀の思想状況の、もう一段折り目を増やした形での再現と見ることができる。

例えばライプニッツは、様々な可能世界から神が最善の世界として選択したのが現実世界であると考えた。こうした弁神論に対して、特に 1755 年のリスボン地震以後、ヴォルテールの『カンディード』（1759 年）に代表されるように、それを疑問視する思考が前景化する。自然状態を万人の万人に対する戦いと規定するようなホッブス流の社会契約論の理論枠組みは、神の法である自然法を想定しながらも（従って、何も神の意志が存在しないわけではないにしても）、明らかに、弁神論とは異質な前提に立っている。不断に続く生存競争状態は人類を疲弊させると考え、社会契約という仮説的な概念を導入しながら、そこから抜け出た状態をより合理的な状態であると規定する（そのような形で政治権力の正当性を導き出す）。19 世紀末から本格化したと思われる神経失調とそれに対する対応についての議論は、文化という第二の自然が再び人類を疲弊させる様相を呈していることに対してホッブス流の社会契約に相当する調節機構を、この場合は実体的に、再び求めているも

のと見れるのではないだろうか。

2　情動論の地平へ

フロイトはエルプらの諸説に対して、間違っているということはないが、神経失調の障害という現象の個々の事情を説明するには、まだ証明が十分ではない、と述べる。ここで効いてくるのが「文化的」性道徳の概念である。文化の有害な影響は、本質的な点で、文化的な諸民族の性生活を、「文化的」性道徳が有害な形で抑え込むことによって生じている、と言われる。フロイトに言わせれば、それが、「病因として作用する諸契機のうちまさに最重要のもの」である。論考の最後をフロイトはこう締め括っている。

「自ら改革の提案を携えて表舞台に出るのは、確かに医者の仕事ではない。しかし、「文化的」性道徳のもたらす害に関するフォン・エーレンフェルスの記述を、現代の神経失調の広がりに対してこの性道徳がもっている意味を指摘する分だけ私が拡張すれば、そうした改革の提案の緊急性を擁護することができるだろう、というのが私の意図するところである。」(S.167)

神経失調という漠然とした様態から目を転じて、神経失調の病であること本来の諸形式を視野に入れれば、そうした原因が見えてくるという。こうした発言に、この時代の先端的な論件に取り組み、それに解決を与えようとするフロイトの野心的な姿勢が窺われる。しかも、エーレンフェルスの「文化的」性道徳の概念が重要というよりは、「文化的」性道徳がどのように関係しているかという点の解明が重要で、フロイト自身がそれをすでに行ってきたという[26]。

本稿にとって、神経失調の原因としてフロイトの指摘するものが最重要かどうかは、関心の外にある。フロイトの野心が満たされることになるかどうか、その水準の議論は行わない。関心を向けるのは、結論ではなく、フロイトの立論の形式である。フロイトは病態についての議論の奥に病因論の次元を設定し（それは疾病についての議論では至極一般的なことだが)、そこに情動論を位置付けることになる。

2-1　疾病区分との関わり——区分前の病態論から踏み込んで

フロイトは、「研ぎ澄まされた臨床の観察」から、神経失調の病態を「元来の神経症」と「精神神経症」という２つのグループに分ける。それは、中毒性か心因性かという区分である。

「前者の場合、障害（症状）は、身体の機能に表れるにせよ、心の機能に表れるにせよ、中毒性の性質をもつように思われる。それは、ある種の神経毒素の過度な補給や欠乏の際に見られる現象と非常によく似た状態となる。ところで、これらの神経症――大抵は神経衰弱として括られる――は、遺伝的欠陥の加担を必要とせず、性生活のある種の有害な影響によって発症しうる。しかも、病気の形式がこの有害物の種類と対応しているため、非常にしばしば、臨床像を容易に特定の性的病因の推定に用いることができる。しかし、そのような規則的な対応関係が、神経失調の病気の形式と、色々な著者が発病原因だと訴える他の［性以外の］有害な文化的影響との間には、まったく見られない。それゆえ、性的な要因が、元来の神経症を引き起こすという点で、本質的な要因であると説明して差し支えないのである。」（S.148f.）

中毒性の神経症という考え方は、「神経毒素」というものの存在を仮定していて、興味深い。例えば、ブロイラーやユングは、早発性痴呆（現在で言う統合失調症の中核的症候群）に対して、毒素の存在を想定していた。ブロイラーは、仮説上の毒素が脳内に作用し、そこから心理的な障害が生じると考えたが、ユングは、心理的な変化によって、毒素が働く状況が生まれると考えた。ユングは、ブロイラーとの立場の違いを、『精神病の内容』（1908年）の第二版（1914年）で加えた前書きでは、心理的な障害と解剖学的な基盤のどちらを一次的または二次的と見るかの違いであると整理している[27]。こうした仮説をフロイトは、「精神分析運動の歴史」（1914年）のなかで、「毒素説（toxische Theorie）」と呼んでいる[28]。中毒性の神経症にとって遺伝は重要ではないが、心因性の後者は異なる。

「精神神経症の場合、遺伝の影響がより重要で、原因はより見通しがたい。しかしながら、精神分析として知られている独特の研究方法が与えてくれた認識によると、こうした病気（ヒステリー、強迫神経症など）の症状は心因性のもので、無意識的な（抑圧された）表象のコンプレックスの作用に左右される。さらに同じ研究方法が、私たちにこの無意識的なコンプレックスに精通するすべを教え、無意識的なコンプレックスは、まったく一般的に言って性的な内容を有することを示した。無意識的なコンプレックスは満たされない人間の性的欲求に由来し、そうした人間にとって一種の代替満足となっている。従って私たちは、性生活を損ない、その活動を抑え込み、その目標を移動させてしまうすべての契機に、精神神経症の病原となる要因を見なければならないのである。」（S.149）

心因性の神経症を解明し、その性的病因を指摘したのが精神分析であるという自負が見て取れる文章である。また、「無意識的なコンプレックス」という表現が、まだこの時期にはユングとの関係が悪くなかったことをよく表している。フロイトはここでさらに、中毒性の神経症と心因性の神経症との理論的区分の価値は、神経失調の人の大半に両方の由来を

もつ障害が観察されるという事実によって損なわれるものではない、と付言している。

フロイトにとって、「神経失調（Nervosität）」はあくまでも病態である。それを病理学の領域において、病気の機制という立論の中で議論することがフロイトの戦略だが、フロイトはこの語を病気の機制まで視野に入れた疾病区分としては位置づけておらず、これを明確に定義された学術用語とも見ていない。フロイトは「神経失調」を現在神経症と精神神経症に分けているわけだが、最初に漠然と「神経失調」とされていたものの背景構造を探っていくと、病気の機制の点で現在神経症と精神神経症に分けられるようになる、と述べているように理解される。そういう意味で、Nervosität は、病気の機制や疾病区分という話以前の病像や症状レベルの観察にフォーカスした言葉であって、そうした点を汲めば、この語に「神経質症」という訳語を当てるのは不適当であることが分かる。フロイトにとって形容詞の nervös や名詞の Nervosität というのはまだ曖昧な言い方で、病気の本来の形式を視野に入れる以前の言葉遣いとして捉えられている。

Nervositätはエーレンフェルス、エルプ、オットー・ビンスヴァンガー、クラフト＝エービングが使ってきた用語で、フロイトが自分のものとして鍛えようとする類いの概念ではなかったと感じられる。<現実神経症＋精神神経症＝神経質症>というような図式が出来上がることは、おそらくフロイトの本意ではない。そのような疾病区分はフロイトにはない。病像や症状レベルの観察からnervösと言われてきたものは曖昧で、その病態をもっと鋭く見れば、二つの病気のグループに振り分けていくことができると述べているのであって、病気を鋭く見ていった結果できる疾病区分の最上位にNervositätという大概念があるわけではない。

この言葉は、後に『精神分析入門講義』[29]でも用いられる。その第24講義[30]は「一般的な神経失調（gemeine Nervosität）」と題されている。どうして一般的な神経失調の話から始めなかったのかという点について、その方が確かに分かり易かったかも知れないが、精神分析という学問には関わりが薄いから、という旨の釈明をしている。この「一般的な神経失調」というのは、現在神経症に近いものを念頭に置いていると思われる。フロイトの軸足は心因性の精神神経症の方にあり、神経失調の話をする時に重要なのはむしろ一般的ではない神経失調の方だというのは、十年近く前の「「文化的」性道徳・・」と同様である。そういう点で、ウィーン大学の聴講生に対するフロイトの立ち位置は、十年近く前のエルプやオットー・ビンスヴァンガーやクラフト＝エービングに対するフロイトの立ち位置と変わらない。それまでは神経衰弱（Neurasthenie）などと並ぶ形で議論されていた神経失調（Nervosität）の捉え方を心因性の方に広げ、背後に性欲論を支えにした自論を持ち込み、むしろ心因性の部分を舞台に論を展開するのがフロイトの戦略である。そういう意味では、Nervositätを「神経質」や「神経過敏」と訳す従来の訳語は、少し単純化して言えば、神経衰弱と隣接ないしは重複している一般的な神経失調の方にふさわしいと感じられる。例えばエーレンフェルスのテクストを訳す場合には、Nervositätに「神経過敏」といった訳語を当てるのが適切かも知れない。

「神経失調」という訳語は、「自律神経失調症」との連想を喚起させる。後者の場合、交感神経と副交感神経のバランスを欠くというような意味で、組織としての神経を明確に念頭に置いている。現代の目から見ると、当時の「神経失調」はそれと同じものではないように思われる。ただし、根底にある発想はよく似ている。近現代的な基準で生活を送ると神経に不調をきたすと当時も考えられていたので、Nervositätを「神経失調」と訳しても、当時と現代との間に無用な脈略を付けるということには決してならない。むしろ、ベアードからフロイトまでの議論を、系譜的に見て、現代の神経失調の先駆けとして位置づけて比較すれば、有意義な議論を喚起できると思われる[31]。

2-2 欲動の抑え込みと昇華

「「文化的」性道徳と現代の神経失調」のテクストに戻ろう。フロイトは、「増大する神経失調」というテーマをより普遍的な連関に組み込むと言い、欲動の抑え込みが文化を築き、それができない者は社会から疎外されていくという文明観を披露する。

「私たちの文化は、まったく一般的に言って、欲動の抑え込みの上に築かれている[32]。個々の人々は、自らの財産、自らの絶対的権力、自らの人格の攻撃的傾向や報復傾向からその一部を譲り渡した。こうした貢献があってそこから、物質的な財においても精神的な財においても、共有の文化財産が生じてきたのである。生活の上で迫られる場合を別にすれば、個々人の気持ちをこうした断念へと動かすのは、おそらく、性愛から派生する家族感情である。この断念は、文化が発展する経過のなかでは進歩的なものであった。そうした経過における進歩の一つ一つが、宗教によって承認された。断念された欲動の充足の一部は、神に犠牲として捧げられた。そのようにして獲得された共有の財は、「神聖」なものとされた。人に従うことのできない資質であるために、こうした欲動の抑え込みに加われない者は、社会的地位やすぐれた能力によって社会で偉大な人物、「英雄」として認められない限り、「犯罪者」、「アウトロー」として社会と向き合うことになる[33]。」(S.149f.)

フロイトがここで中心的に念頭に置いている欲動は、性欲動[34]である。フロイトの考えによれば、性欲動は文化活動に対して異常なまでに大きな量の力を提供するが、しかもそれは、本質的に強さを減じることなくその目標を移動させることができるという、性欲動にとりわけ顕著な特性のお陰である。

「元々は性的な目標を、もはや性的ではない、しかしながら心的にはそれとよく似た別の目標に取り替えるこうした能力は、昇華能力と呼ばれる[35]。」(S.150)

性欲動をどれぐらい昇華できるかは、個々人によって異なる。

「性欲動の本来の強度は、おそらく個々人で異なった大きさであろう。確実に変動するのが、性欲動のうち昇華に適した部分の量である。私たちの想像によれば、個々人において、性欲動のうちどれほどの部分が昇華可能で利用可能なものと判明するかは、何よりもまず、持ち合わせている［素質としての］内的体制によって決まる。それに加えて、生活の影響や心的装置への知的な感化によって、より多くの部分を昇華させることができるようになる。しかし、こうした移動のプロセスが限りなく継続されるということは、絶対にあり得ない。それは、私たちの機械で熱を力学的な作業に変換する場合と同じである。ある規模の直接的な性的満足は、大抵の内的体制には不可欠であると思われる。個人によって変わるこの規模の直接的満足がうまく行かないと[36]、機能面で有害であったり、主観的に不快であったりすることから、病的な状態に数え入れるほかない諸現象を通じて報いを受けることになってしまう。」（S.150f.）

何もかも昇華すればよいというものではなく、直接的な満足も必要であるという考え方は、1909年にアメリカで行った5日間の連続講演の締め括りにおいても述べられている。

「昇華に対する適性という点に表れている性的成分の可塑性は、確かに、昇華をますます先に進めてより大きな文化的効果を得たいという大きな誘惑をもたらすかも知れません。しかし、私たちの機械では、消費された熱エネルギーの一定割合以上が有益な機械的な作業に変えられているのであって、その点を忘れがちになればなるほど、私たちは、性的な欲動をそのエネルギー量のすべてにわたって本来の目的から逸らせようと努めることも控えるべきでしょう。それがうまく行くことはあり得ないのです。」[37]

2-3　情動論の系譜学的考察

我々がここで考察したいのは、こうした欲動論を情動論の系譜のなかで捉え、18世紀の啓蒙主義を考える上での参照項とする可能性である。当然のことながら、欲動（Trieb）と情動（Affekt）は別の概念である。Trieb（欲動）は、treiben（駆り立てる）という動詞からも分かるように、人をある目標に向かわせる一般的な衝迫を言う。Affekt は、感情面での動きを言う。しかし、精神分析では、情動は欲動の質的な面を表すものと位置付けられていて[38]、それらを取り扱うための理論構成にも共通する面が多い。どちらも量的な特性をもったものとして扱われ、欲動の動き（Triebregung）や情動の動き（Affektregung）といった形で放出や流れや抑え込みや滞留について議論される。精神分析のいわゆる経済論である。ここでは、理論構成自体に着目するため、欲動エネルギーの運命と情動量のなりゆきについては、特に区別せずに考える。

本稿では、18 世紀の思想史や特に詩学史に対して参照項たりうるかを検討することが課題なので、理路の細部を精査することではなく、ブレーンストーミング的に比較の論点を整理していくことが目的となる。

別の場所で論じたが[39]、一般的な傾向として、18 世紀詩学の基礎理論である自然模倣説は、人間の目に見える現実の自然を模倣対象とするのではなく、そこから悪や醜といった契機を取り去ったより普遍的な連関が模倣対象であると考えている。作者の創造は、神があらゆる可能世界のなかから最善の世界を選び取った創造を小規模に模倣にするものとされる。人間の目に現実の世界が悪や醜を含んだものに見えるのは、人間の視野の狭さのためである。こうした議論には弁神論的な考え方が見て取れる。模倣の概念には陶冶という側面があり、人間を普遍的な真理へと導こうとする。

我々がここまで見てきた神経失調論の構図は、この「陶冶としての模倣」のまさに裏返しと見ることができないだろうか。第二の自然と化した文化は、反弁神論的に人間に厳しい様相を見せるようになり、神経失調という形で人間を疲弊させていく。フロイトは、病態から病因へと議論を展開させるところで、そうした近代の神経失調の病態の基底に情動の問題圏を設定した。弁神論／反弁神論の地平から情動論の地平へというのは、哲学的な側面と修辞学的な側面を合わせもった自然模倣説においても、その接合や重心移動ということが研究史で長年関心を惹いてきた部分である。フロイトの神経失調論では、言ってみれば、文化そのものが、我々の情動論上の分類[40]で言う情動を抑制し、制御するタイプの振る舞いを見せている。欲動を過度に抑え込むことが、人間を疲弊させる反弁神論的な様相を産み出している。18 世紀詩学の模倣説が考えていたのはそれとは逆で、情動を利用しながら、弁神論的な様相を産み出していくことである。哲学的な可能世界論で説明される普遍的な真理を、修辞学的な同化と異化の効果を効かせながら伝えるのが、模倣説の想定する詩作品である。

情動論の系譜が、前号で見たように、情動を抑制し制御しようとする医学や哲学の学説の系譜と、情動を喚起して巧みに利用しようとする修辞学の学説の系譜に分けられるとすると、精神分析の場合は、ひとまずは、医学的な系統に組み入れられるだろう。分析は、抑圧したものの回帰して神経失調を引き起こす情動のエネルギーを制御し、解放しなければならない。しかし、「昇華」の概念には、厄介な代物を手なずけるという側面とは異なる、文化的な創造にうまく利用しようという、情動を肯定的に扱う側面が見て取れる。治療としても、欲動を昇華させることができれば、あるいは、個人に昇華能力を身につけさせることができれば、それが最も理想的な帰結である。

精神分析の昇華概念は、性欲動を性的ではない領域へと転化させることを基本としている。攻撃欲動の昇華については議論があるが[41]、フロイトはほとんど突き詰めていない。このように、精神分析では、欲動の種類を限定して議論されているわけだが、啓蒙主義時代の情動論、情念論の思想風景と対照させて考察する際には、そうした限定については我々の関心の枠外にある。我々にとっては、文化を発展させる高次のものへの転化という面が

重要である。

昇華によって欲動の目的が転化され高尚な次元へと導かれるのは、自然模倣説において、高次の模倣によって、普遍的な連関を見通す高みへと到ることに類似する。文化が人間を疲弊させる形で働くのが、神経失調を引き起こす抑え込みだとしたら、昇華の文脈では、文化は、神経失調を産み出すだけではないところを見せる。そこには、単なる悪ではない文化装置の側面がある。

実際の治療では、抑圧されながら回帰して病状を作りだしている情動を解放するのに、「転移」によってその情動を現前化させる。その後、それが昇華されるにしても、いったん医師が触媒となって情動を引き寄せる。啓蒙主義詩学が論じる詩作品は、同化によって作品に感情移入させるとともに、異化によって受容者にブレークスルーへの切っ掛けを与え、受容者を普遍的な真理へと向かわせる。模倣説の弁神論的な面と情動論的な面はどのように接合されているのかを探ることは詩学史研究の課題だが、そう考えていくと、＜抑圧→転移→昇華＞というこうした精神分析の図式が一つの範型的なモデルにならないか、そのままではならないとしたらどの点を修正すればよいか、今後考えていく価値のある問題になってくると思われる。

昇華では欲動が文化を発展させる形で学問や芸術の分野で利用されると言っても、修辞学的な情動論で情動を積極的に利用するという場合とは、利用の意味が異なるのではないか、という疑問が生じるかも知れない。確かに、欲動を高次の領域に導くのと、情動によって高次の領域に導くのとでは、導く力の源泉が異なっているようにも響く。しかし、欲動や情動の力を借りてという点では共通している。啓蒙主義詩学が論じる詩作品の場合も、それが利用する情動というのは、実は無理に抑え込まれていて、解放を待っていた情動なのだろうか。この点も、今後の議論にとって、興味深い論点であると思われる。

3　精神分析の文明史観における啓蒙

3-1　抑え込みに連動した文化段階

病態の議論の背後に欲動論の次元を設定することによって病因論へと歩を進めたフロイトであったが、文化が損害をもたらす神経失調という現象を欲動の過度の抑え込みに見た後、その知見をさらに歴史的な図式へと発展させる。

フロイトは、『性理論のための三篇』(1905 年)[42]を踏まえ、「人間の性欲動は、最初は生殖という目的に役立つものではまったくなくて、幾つか特定の種類の快の獲得を目標にする」という点を指摘するとともに、小児性欲[43]の自体愛の段階からその後の対象愛の段階へ、「諸性感帯の自律から、生殖という役目を負った性器の優位に対する諸性感帯の従属へ」という性欲動の発展過程を提示する。そして、その上で、次のように述べる。

「こうした発展の間に、自身の身体から与えられる性的興奮は、生殖機能にとって不要なものとして抑制され、好ましいケースでは昇華に引き渡される。文化活動に利用可能な諸力は、大部分がそのようにして、性的興奮のいわゆる倒錯的な部分を抑え込むことによって獲得されるのである。」(S.151)

フロイトは、個人の性欲動のこうした発展史に関連して、人類史に３つの文化段階を想定する。

「第１の段階では、性欲動の活動は生殖という目標をも超えて自由である。第２の段階では、性欲動に関わるものは、生殖に役立つものを除いてすべて抑え込まれている。第３の段階では、法的に正当と認められた生殖だけが性目標として許される。我々の現在の「文化的」性道徳は、この第３の段階に対応している。」(S.152)

第１段階から第２段階への移行は、個人であれば、大人になる正常な移行である。フロイトは、自体愛から対象愛への性欲動の発展が正しく行われない人間は、社会の第２段階の要求を満たせないと考える[44]。この論考によれば、こうした発展障害を起点に、正常な性からの、つまり文化を促進する性からの二つの有害な逸脱[45]、倒錯と神経症が生じてくる。

性欲動の強さによって異なるが、最初に生じるのが目標倒錯や対象倒錯である[46]。この両種の発展障害のもたらす害が予想を下回る結果にしかならない場合、それは性欲動の複雑な組成のおかげで、欲動の一つないしは幾つかの要素が発展から除外されていた時でも、また別の有用な形に性生活を最終形成することができる、という。「対象倒錯者、同性愛者の資質は、しばしば、文化的な昇華に性欲動を特別に適合させるという点で際立っている」のである。

目標倒錯や同性愛がそれよりも強く形成されると、特にそれのみが形成されると、そうした倒錯的性質を負った者は、社会の役には立たない不幸な者となり、その結果、第２段階の文化の要求でさえ、人類のある割合の者には、苦悩の源泉と認知されることになる[47]。

それよりも強烈で、しかしながら倒錯的な性欲動の場合、結末として二つのケースがあり得る。倒錯者が倒錯のままであるケースと、神経失調となるケースである。前者の場合、「文化水準から彼らが外れていることの様々な結果を引き受けなければならない」し、倒錯的な欲動の抑え込みが達せられる後者の場合でも、個人にとっては、「抑え込まれた欲動を元のまま充足するのとまったく同じように有害であって、個人を社会に対して同じように使い物にならないものにしてしまう」。

「ここで欲動の抑え込みの結果として現れる代替現象が、私たちが神経失調として、より専門的に言えば精神神経症として（本論導入部参照）記述するものの本質である。神

経症患者というのは、文化の要求の影響下でそれに逆らう内的体制をもち、自らの欲動をただ見かけ上抑え込むが、その抑え込みが次第次第に失敗に終わる、そういう部類の人間である。そのため、文化的な仕事への共同参画を維持すると、必ず大いに力を消耗し、内面が貧しくなってしまい、時には病人となって立ち止まらざるを得ない。」(S.154)

「経験が教えるところによれば、大抵の人間には、それを超えると資質が文化の要求に従うことができなくなるという限界がある。自らの資質が許す以上に高尚であろうと欲する者はすべて神経症になる。彼らは、もっと下手にしていることが可能なままであったら、もっと良好な状態でいられただろう。」(S.154)

フロイトは、文化的な基準がすべての人に対して性生活を同じように営むことを要求するなら、それは明白な社会的不公正の一つだと言う。そうした営みは、ある人々にはその内的体制のお陰で苦もなくこなせるものであっても、他の人々にはきわめて重い心的な犠牲を負わせるので、結局この不公正は、「大抵は道徳規範に従わないことによって打ち消される」。つまり、規範からの逸脱が救いになるのである。

第１段階から第２段階への移行を、個人であれば、大人になる正常な移行として設定したフロイトにとって、第３の段階は、制限が行き過ぎた段階として位置付けられている。

「性的自由をさらに制限し、文化の要求を第３段階の水準にまで高めるなら、つまり、法的に正当な結婚における性的活動以外のあらゆる性的活動を禁じるなら、今や生じるであろう結果を予言するのは容易である。文化の要求とはっきり対峙した姿勢をとれる強き者たちの数は、著しい規模で増えるだろうが、文化的な種々の影響の圧迫と自らの資質の抵抗が葛藤するなかで、神経症を患うことへと逃げ込む[48]より弱い者たちの数も、同様に増えるだろう。」(S.155)

フロイトは、第３の文化段階が課す課題として、結婚までの禁欲の問題を挙げる。そして、第２の文化段階の要求に対しては健康であり続けたであろう人たちでも、今やかなりの規模で神経症へと導かれてしまう、と見る。性欲動ほどの強力なものを充足せずに克服するには人間のあらゆる力が必要で、昇華による克服に成功する人は僅かであり、しかも、こうした人たちも克服に成功するのは時折のことに過ぎず、若い力が燃えさかる時期に容易に克服できることはきわめて稀である。他の多くの人たちは神経症となるか、それ以外の形で障害に到る[49]。

3-2　利益と損失の比較考量

フロイトは、第二の自然と化した文化が強いる道徳について、それがもたらす利益と損

失を比較考量することで、その必然性に疑問を投げかける。結婚までの禁欲という問題に対して、結婚が万能薬かというと、そうではない。文化的性道徳は、大抵の場合とても少ない数の子づくりで満足するよう夫婦に強いる形で、結婚生活そのものにおける性交にまで制限をかけている。そうして、数年間で、結婚以前のかつての状態に引き戻されてしまうという[50]。結婚は、その期間だけでも欲動を満たしてくれるものではなく、結婚以前の抑え込みの埋め合わせには到底ならない。文化的な利得は、重大な形で表れるのは少数の者にすぎないこうした病を埋め合わせて余りあるという主張に対して、フロイトは、神経症が大抵の場合その真の重大性に従って査定されていないという点と、神経症と別の損失ももたらされているという点を指摘する[51]。またフロイトは、「ある人の性的な振る舞いは、しばしば、世の中におけるその人の他の反応様式すべてにとって範例的である」と考える。文化的性道徳による抑制は、他の領域にまで悪影響が及ぶことになる[52]。さらには、「慢性の神経症は、生存能力を完全に奪ってしまうことはないにしても、個人にとっては例えば結核や心臓疾患クラスの重い人生の負荷となる」という点も強調される。

一定数の虚弱な者を文化的な仕事から締め出すだけであって、他の者には、ただ主観的な苦痛を感じるという対価を払うだけで、文化的な仕事への参加を許す、ということであればその道徳を認めてもよさそうであるが、そういうことでは済まないのである。そうして、文化の定めた道徳が文化的な仕事への参加を大幅に拒む事態になった時、道徳自体の意味が問われるようになる。似たようなことは、直接には性的で反文化的とは言えない他の心の動きの抑え込みの後でも観察される。フロイトに拠れば、資質としてもっている非情さや残虐さへの傾向を力ずくで抑え込んで過度に善良になった人は、その際しばしばエネルギーを奪われているので、せっかく補正した心の動きに合致したことすべてを実行できない。結局のところ、全体としてみれば、善良なことは、抑え込みなしでできたはずのものよりもわずかなことしか行えない。こうした議論を経てフロイトは、「我々の「文化的」性道徳は我々に犠牲を払うよう求めてくるが、それは犠牲に値するものなのだろうか」、という根本的な問いを発するのである[53]。

3-3　文明史観と芸術の役割

フロイトがここで語っている文明史観を整理すれば、人間の本来の自然な欲動を抑え込む形で文化は発展するが、それが過度に進み、過度に抑え込むようになると、その抑え込みは耐えるに値しないものとなる段階にまで行き着くのではないか、ということになる。見る角度を変えれば、人間社会の文明の発展に合わせて、個々の人間の資質もまた文化に快を見出すように変わっていっているかどうかをフロイトは見極めようとしているように思われる。その場合に重要になるのが、昇華能力をもつことである。そして、精神分析家が、転移関係のなかで神経症患者が抑圧したものを現前化させ、昇華の方向にもっていくとしたら、その営為は、啓蒙主義時代の模倣説が、普遍的な真理を教えるとされる芸術作

品に、情動の同化と異化の効果を利用しつつ、普遍的な連関を示すところに受容者を導く役割を与えていることと重なって見える。この点も、啓蒙主義時代の詩学にある種の文明史的な前提が織り込まれていると考えれば、人類レベルの文明の発展に対応するような形で、啓蒙主義時代の芸術観において、文化を支えるととれる性質が芸術に見て取れるのは、自然なことのように思われる。

フロイトには、それとは別の文明史観も見られる。以下に引用するのは、「精神分析への関心」(1913 年) の一節である。

「原初の諸民族についての研究は、人類が当初子供のような万能信仰に捕らわれていたことを教えてくれる。またそうした研究が理解させてくれるところによれば、心のなかの数多くの形成物は、現実をよりよい形で支配し、満足感を得るために余すところなく利用できるまで、この万能感が脅かされるのを否定したり、情動生活に影響を与えないよう、そのようにして現実を遠ざけておいたりする努力なのである。不快を避けるという原理は、外の世界に適応するというよりより原理に取って代わられるまで、人間の行いを支配する。人間による世界の支配が進展していくのと並行して、人間の世界観の発達も進む。元来の万能信仰からはますます離れ、アニミズム的な段階から、宗教的な段階を経て、科学的な段階へと上っていく。神話や宗教や道徳は、欲望の満足が得られないのを埋め合わせる試みだと考えれば、こうした文脈にぴったり当て嵌まる。」[54]

「人間による世界の支配」が進む以前は、人間は弱い存在で、世界の現実は人間に対して大変厳しいものなのだが、そうした事実認識に耐えられないため、アニミズム信仰や宗教によってそれを覆い隠す。そう考えると、啓蒙主義時代に宗教が理性の吟味にかけられたのは象徴的なことと言える。そして、フロイトは後に、『ある幻想の未来』(1927 年) において、宗教が幻想に過ぎないとしたら、我々の他の文化的財産も似たような性質ではないかという問いを発している[55]。

万能観の埋め合わせが不要になっていく形の思想の発展を前提とすれば、18 世紀詩学の自然模倣説と弁神論との密接な関係は、非常に薄められているとはいえそこにまだ感じられる宗教的な匂いによって、模倣説の時代性をよく表現しているのかも知れない。しかし、模倣説が弁神論的な視点に立って作者を神に準え、作者に対して様々な悟性能力を兼ね備えていることを求めるのは、見方を変えれば、一種の理想的な到達地点を語っているに過ぎず、論の構えに過ぎないと受け止めることもできそうである。そうであれば、模倣説は単純に前近代的な宗教的な思考を引きずっているとは言えなくなる。

宗教を理性の吟味にかけた以降に芸術の果たす役割がどうなるのかは、興味深い問題である。宗教の代わりにそれと同じように現実を覆い隠す幻想を与えるのか、人を文化の高みへと引っ張るのか、そこには、時代の全体的な趨勢とともに、個々人がその時代の要請にどこまで適応できているかという視角もあると思われる。時代が文化の高みへと導く芸

術を求めていても、時代の要請に適応できない弱い存在のための芸術もありうるのかも知れない。フロイトには、「神経症自体が、諸制度を通じて社会的に解決されなければならない欲望の補償の問題を個人的に解決する試み」という着想がある。精神分析が啓蒙の問題に一定の示唆を与えるのは、このような形で、文明化の要請のネガティブな解決（神経失調）を入り口としながら、文明化の進展の様相を描き、結果として、文明史観を提示することになるからであろう。

結論に代えて

本稿では、前号の付論として、「「文化的」性道徳と現代の神経失調」というフロイトの初期の論文を取り上げながら、精神分析の立論を情動論の系譜と関係付けることで、啓蒙主義に対して離れた地点から光を照射する参照点とすることを試みた。

ホッブス流の社会契約論のように、不断に続く生存競争状態は人類を疲弊させると考え、社会契約という仮説的な概念を導入しながら、そこから抜け出た状態をより合理的な状態であると規定する思考を、大きな括りとして弁神論を疑問視する思考の一種と見るなら、19 世紀末以降の神経失調論は、文化という第二の自然が再び人類を疲弊させる、いわば反弁神論的とも言うべき様相を呈していることに対して、社会契約に相当する調節機構を再び求めているものと見てよさそうである。「神経を病んだ文明人」という物語は、18 世紀の「高貴な野蛮人」という物語の続編である[56]。

フロイトは、そうした神経失調論を欲動論、情動論から捉え返した。この議論は、哲学的な側面と修辞学的な側面を合わせもった自然模倣説に対して、その接合に関心を抱く 18 世紀詩学史研究にとって興味深い参照点となる。欲動を過度に抑え込むことが、人間を疲弊させる反弁神論的な様相を産み出すのは、情動を利用しながら、弁神論的な様相を産み出していくことを考えていた 18 世紀詩学の模倣説のコンセプトの裏返しである。そうした意味で、神経失調論の構図は、陶冶としての模倣のまさに裏返しと見ることができる。情動論的な構造をもって陶冶が進んで弁神論的な様相を産むことの反転が、欲動論的な構造をもって神経失調が進んで反弁神論的な様相を産むことである。フロイトが、欲動を犠牲にしながら人類共同の文化を前に進める文明史観を抱いたように、文化そのものに本来、個人の権利の一部を犠牲にして社会を構築する社会契約論的な構造があるわけだが[57]、それが過度に進展した時に、行き過ぎたことによって螺旋階段を一周したような状況になって、改めて社会契約論的な調節機構が必要となる反弁神論的状況を迎える。

精神分析にはさらに「昇華」の概念がある。昇華によって高尚な次元へと導かれるのは、自然模倣説において、普遍的な連関を見通す高みへと到ることに似ている。＜抑圧→転移→昇華＞というこうした精神分析の図式は、同化によって作品に感情移入させるとともに、異化によって受容者にブレークスルーへの切っ掛けを与え、受容者を普遍的な真理へと向

かわせる模倣の構造を議論するのに、とりわけ、模倣説の弁神論的な面と情動論的な面はどのように接合されているのかを探るのに、一つのモデルになりそうである。啓蒙主義詩学が論じる詩作品の場合も、それが利用する情動というのは、無理に抑え込まれ解放を待っていた情動なのか、考察する必要がある。

フロイトには、文明化とともに欲動の抑え込みが進行するという文明史観とともに、人間による世界の支配が進むことによって万能観の埋め合わせが不要になっていくとする文明史観も見られる。抑え込みが進み反弁神論的と言うべき状況が現出すると捉える思考と、宗教は幻想に過ぎないとして神の力を信じない思考とは、根底において軌を一にするものと思われる。情動論の系譜と精神分析の立論の構図を関係付けることの外側には、精神分析の抱く文明史観のなかに啓蒙主義時代が得ることになる位置付けが、我々の従来の啓蒙主義研究と合致することになるかどうかという問いがある。

---

1 福田覚「情動論から捉え返した詩学史記述の可能性」、『ドイツ啓蒙主義研究 9』2009 年、13 頁以下。

2 Sigmund Freud: Die >kulturelle< Sexualmoral und die moderne Nervosität, 1908 in: Gesammelte Werke, Bd.7, S.143-167　以下、このテクストからの引用は、引用の後にページ数を補う形で示す。

3 クリスティアン・フォン・エーレンフェルス（1859－1932）はオーストリアの哲学者・心理学者。プラハ大学で哲学教授を務めた。フランツ・ブレンターノやアレクシウス・マイノングの弟子に当たり、当初は哲学的関心を心理学に向けていた。「ゲシュタルト質について」（1890 年）という論文でゲシュタルト心理学の創始者の一人と見做されている。その後はとりわけ価値論や倫理学の分野で研究を行った。結婚制度を大胆に批判した点をフロイトは、『機知』の第 3 章第 3 節で称賛している。

4 Christian von Ehrenfels: Sexualethik, 1907

5 ibid. S.7

6 このあとに続く文章では次のように言われている。「資質的な所有物とは、ここでは、生理学的な生殖によって子孫へと遺伝することがある、個人または民族の身体と心の素質のことを言う。例えば、身長、筋力、視力、鋭い悟性、生き生きとした想像力である。それに対して、個人または民族の文化的な所有物というのは、資質的ではないすべての所有物のことである。このように単なる否定によって性格付けられることから、文化的所有物は様々なカテゴリーに分類される。ここに数え入れられるものとして、例えば機械や住居や鉄道施設といった事物、書かれた記録や彫刻や絵画、さらには様々な手仕事のこつや読み書きの技法、伝統的に伝えられてはいるが生理学的な生殖を通じて受け継がれるわけではない言語そのものがある。人間が獲得した学問的知識のすべて、社会的・政治的制度、その他多くのものがここに入る。・・『知識は文化的だが、悟性は資質的である。医学は文化的だが、健康は資質的である。』」（ibid. S.7f.）

7 ibid. S.32

8 また、エーレンフェルスは、現代ヨーロッパの性道徳について、こう述べている。「両性にとって不道徳と見なされるのは［・・］、自然なものであれ不自然なものであれどのようなものでも性欲動の身体的な満足が明るみに出されること、婚姻外の性交のあらゆる兆しが暴露されることである。しかもここには、男性については常に女性よりも寛容に扱われるという修正がつく。［・・・］従って女性に対しては、我々の場合、単純明快できわめて厳格な一夫一婦制の性道徳が適用されるが、男性に対しては二重の性道徳が適用される。」（ibid. S.24）　また、男性の道徳がダブルスタンダードになるのは、「我々の公式の道徳の内にある不自然な、どんなものでも画一化してしまうフェミニズムの必然的結果」であると言われている。（ibid. S.26）

9 ibid. S.35

10 ibid.

11 Vgl. ibid. S.32f.

12 Vgl. ibid. S.33f.

13 Vgl. ibid. S.35

14 Wilhelm Erb: Über die wachsende Nervosität unserer Zeit, 1893

[15] ibid. S.7f.
[16] ibid. S.10
[17] ibid. S.22
[18] ibid. S.23-24
[19] ibid. S.24
[20] 兄のロベルトも精神科医で、クロイツリンゲンの「ベルヴュー治療院」の院長を務めた。その息子ルートヴィヒ・ビンスヴァンガーにとってオットーは伯父に当たる。
[21] Otto Binswanger: Die Pathologie und Therapie der Neurasthenie, 1896
[22] ibid. S.47
[23] 『ヒステリー研究』(1895 年)、「神経症の遺伝と病因」(1896 年)、1897 年 11 月 5 日のフリース宛書簡(書簡番号 145、邦訳『フリースへの手紙』290 頁)においてベアードへの言及が見られる。
[24] Richard von Krafft-Ebing: Nervosität und neurasthenische Zustände, in: Hermann Nothnagel (hg.): Specielle Pathologie und Therapie, 1895
[25] ibid. S.11
[26] 「私はこうした主張を一連の専門的な論文において証明しようと試みた。それをここで繰り返すことはできないが、私の研究からその最も重要な議論をこの場所でも引いてみようと思う。」(S.148) この箇所の先の文に対する注釈の形で、「『神経症理論のための小論集』、ウィーン、1906 年(第 4 版、1922 年)」が挙げられている。
[27] Carl Gustav Jung: Der Inhalt der Psychose, 2. Aufl., 1914 in: Gesammelte Werle, Bd.3, S.173f. ここには、精神の病を脳の病に還元しない方向性を見据えるユングの立場が現れている。しかしフロイトは、「毒素説(toxische Theorie)」という簡易な表現をとっていて、こうした表現ではブロイラーとの違いは汲み取りづらい。
[28] Sigmund Freud: Zur Geschichte der psychoanalytischen Bewegung, 1914 in: Gesammelte Werke, Bd.10, S.68
[29] Sigmund Freud: Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, 1916-1917 in: Gesammelte Werke, Bd.11
[30] ibid. S.392f.
[31] もっとも、厳密に言えば、フロイトがどこまで組織としての「神経」そのものを患うと考えていたのか、Nervosität という言葉のなかに Nerv との繋がりが過去の思想の痕跡のようにしてただ残っているだけなのか、そこは「「文化的」性道徳・・」のテクストを読むだけでは判然としない。
[32] 学生用廉価版(Studienausgabe)によると、確かにこのテクストは、文化と欲動生活の間にある対立を詳しく論じたフロイトの最も初期の著作であるが、このテーマについての考えはかなり以前から形成されていて、「近親相姦は・・反社会的である。文化の本質はこうした前進的な断念にある」という草稿N(1897 年、『フリースへの手紙』261 頁)の一節、「我々の文明も神経衰弱の拡大に責任ありと言って間違いではない」という「神経症の病因論における性」(1898 年)の一節がそのことを示唆しているという。『性理論のための三篇』(1905 年)の末尾に付された要約には、「文化と自由な性の発達との間の対立的な関係」という言葉も見られるが、潜在期が人間の性の発展に影響するというフロイトの理論全体が、事実上こうした文化と欲動の対立をすでに暗黙のうちに含んでいる、というのが学生用廉価版の見立てである。そうした観点から学生用廉価版は、このテクストの大部分が『性理論のための三篇』の結論を要約したものであるとしている。Vgl. Alexander Mitscherlich u.a. (hg.): Sigmund Freud. Studienausgabe, Bd.9, S.11 (=Editorische Vorbemerkung)
[33] 学生用廉価版は次のように指摘している。「このパラグラフの主旨は、「神聖」なものの定義も含めて、[1897 年 5 月 31 日の] フリース宛書簡に同封された草稿に見いだされる(草稿N)[『フリースへの手紙』261 頁]。「神聖」という言葉は、『モーゼという男と一神教』(1939 年)の第 3 章[第 2 節(D)]においてもう一度検討される。」Vgl. ibid. S.18
[34] 性欲動の周期性について、フロイトはこう述べている。「性欲動は――より精確に言えば、様々な性欲動は、ということになる、というのも、分析的な研究が教えるところによれば、性欲動は多くの成分から、部分欲動から構成されているからである――、人間の場合、おそらく大抵の高等動物よりも強力に形成されていて、ともかくより恒常的である。動物では性欲動は周期性と結び付いて表れるが、そうした周期性をほぼ完全に克服したからである。」(S.150)
[35] 昇華とは逆の事態が固着である。「性欲動に文化的価値を与えるこうした置換可能性とは対照的に、性欲動には、これまた特に頑強な固着ということが起こる。固着によって性欲動は利用不能となり、時にはいわゆる異常なものへと変質してしまう。」(S.150)

[36] ここで用いられている原語は Versagung である。学生用廉価版およびスタンダードエディションでは、後にフロイトが、神経症の発症を引き起こす主たる素因を記述するのに、この語をより広い意味で用いた、とされている。Vgl. Alexander Mitscherlich u.a. (hg.): Sigmund Freud. Studienausgabe, Bd.9, S.19; James Strachey (ed.): The Complete Psychological Works of Sigmund Freud, vol.9, p.188 スタンダードエディションによると、その広い意味の場合に英語では frustration と訳される。「より広い意味」というのは、リビドーの充足を失敗に終わらせる外的な障害も内的な障害もともに含め入れて、ということだと思われる。これに呼応するように、「神経症の発症類型について」(1912 年) に付された学生用廉価版およびスタンダードエディションの注釈では、外傷理論を放棄したあとフロイトは神経症の様々な素因に関心を集中させたが、外的な要因ではなく満足に対する内的な障害に由来する神経症の可能性について言及するのはさらに少し後になってからで、例えば「「文化的」性道徳と現代の神経失調」においてそうした内的な障害について Versagung の語を用いて語っている、との見方が示されている。Vgl. Alexander Mitscherlich u.a. (hg.): Sigmund Freud. Studienausgabe, Bd.6, S.217; James Strachey (ed.): The Complete Psychological Works of Sigmund Freud, vol.12, p.229f.

[37] Sigmund Freud: Über Psychoanalyse, 1909 in: Gesammelte Werke, Bd.8, S.59

[38] ラプランシュ、ポンタリスの用語辞典では、次のように述べられている。「情動は欲動エネルギーとその変化物の量の質的表現である。」 Laplanche et Pontalis: Vocabulaire de la psychanalyse, 2007, p.12 (邦訳：ラプランシュ、ポンタリス『精神分析用語辞典』、1977 年、233 頁。)

[39] 福田覚「陶冶の概念としての模倣」、『ドイツ啓蒙主義研究 7』、2007 年、17 頁以下、ならびに、「連想と連関の概念としての模倣」、『ドイツ啓蒙主義研究 8』、2008 年、17 頁以下参照。

[40] 注 1 参照。

[41] 例えば、国同士が戦争する代わりにスポーツで競う場合、それを攻撃欲動の昇華と考えてよいと思われる。

[42] Sigmund Freud: Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie, 1905 in: Gesammelte Werke, Bd.5

[43] 小児性欲についてフロイトはこう述べている。「子供時代には性欲動は、快の獲得という目標を性器だけでなく他の身体部位 (性感帯) においても達成する。それ故、性欲動は、これらの快い対象以外の対象から目を背けて構わないことになる。私たちはこの段階を自体性愛の段階と呼び、その段階を制限する課題を教育に割り当てる。何故なら、この段階に留まることは、性欲動を後に支配不能、利用不能なものにしてしまうからである。」(S.151)

[44] 「これらの諸段階のうち第 2 の段階を基準面とした場合、ある数の人間は、内的体制がもたらす種々の理由からこの段階の要求を満たせない、ということをまず最初に確認することになる。かなりの数の個人において、自体愛から、性器の合一を目標とした対象愛への性欲動の上述の発展が正しく行われておらず、また十分に徹底して行われてきていない。」(S.152)

[45] 「この二つの逸脱は、互いに対してほぼポジとネガのような関係にある。」(S.152) 後述の箇所でも、次のように述べられる。「しかし私は、神経症を倒錯の「ネガ」と呼んだ。何故なら、神経症の場合、倒錯的な動きが抑圧された後に心の無意識から表れ出てくるからであり、神経症はポジの倒錯者と同じ諸傾向を「抑圧された」状態で保持しているからである。」(S.154) 「倒錯と神経症がお互いにポジとネガの関係にあるという見解は、同世代を観察することでしばしば明白な証拠を見いだす。兄弟姉妹のうち、男性兄弟の方は性的な倒錯者で、女性姉妹の方は、女性としてより弱い性欲動しか備わっていないため、神経症患者であるが、神経症患者の女性姉妹の症状は、性的により活発な男性兄弟の方の倒錯と同じ傾向性を示している、ということが非常にしばしば見受けられる。それに対応するように、一般に多くの家系では、男性は健康だが社会的に好ましくないほど不道徳で、女性は高尚で過度に洗練されているが重い神経失調である。」(S.154) 学生用廉価版 (Studienausgabe) は、フロイトがポジとネガという命題を最初に公にしたのは、『性理論のための三篇』(1905 年) においてであるとしているが、スタンダード・エディションによると、考え自体はフリース宛の書簡において何年も前に述べられている。1897 年 1 月 24 日のフリース宛書簡を参照 (書簡番号 119、邦訳『フリースへの手紙』233 頁)。Vgl. Alexander Mitscherlich u.a. (hg.): Sigmund Freud. Studienausgabe, Bd.9, S.21; James Strachey (ed.): The Complete Psychological Works of Sigmund Freud, vol.9, p.191

[46] 「まず第一に、あまりにも強すぎて制止しえない性欲動をもった人を別にしても、暫定的な性目標への幼児的な固着が生殖機能の優越を阻んでしまった様々な種類の目標倒錯者がいる。それに、まだ完全に性のことを知らない状態で性目標が異性から逸らされてしまった同性愛者あるいは対象倒錯者がいる。」(S.152)

[47] 「資質的に他の人と異なっているこうした人々の運命は、絶対的な強さの性欲をもって生まれたか、

比較的弱い性欲を持って生まれたかによって様々である。後者のケース、つまり一般的な弱い性欲動の場合、倒錯者は、文化段階の道徳的要求との葛藤に彼らを陥らせるような諸傾向を完全に抑え込むことに成功する。しかしまた、理想的に考えても、これが倒錯者があげることのできる唯一の成果にとどまる。というのも、彼らは、自らの性的な欲動をこうして抑え込むことに力を使ってしまうからである。その力は、さもなくば文化的な仕事に向けるはずだったものである。彼らはいわば、自らの内側でも阻害され、外側に向かっても麻痺させられているのである。我々があとで、第3の文化段階において要求される男女の禁欲に関して繰り返すことになる論点が彼らにも当てはまる。」(S.153)

48 ここでの表現は、「疾病への逃避」という術語を先取りしている。その術語を導入したのは、「ヒステリー発作についての概略」(1909年)においてで、そのテクストの執筆は1908年と推定されている。

49 「経験が示すところによれば、我々の社会を構成している人々の多くは、禁欲という課題の遂行が資質的に困難である。性的な制限がより緩やかな場合にでも病気になる人は、我々の今日の文化的性道徳が差し向ける要求の下では、より早くより強く病気になる。というのも、資質上の問題や発展障害によって正常な性的追求が脅かされることに対して、我々の知る最もすぐれた防備は性的な満足それ自体である。神経症になりやすい資質であればあるほど、その人は禁欲にうまく耐えられない。」(S.156) 我々の社会で神経失調の発症が増えているのは、こうして性の制限が強まっていることが原因である、とフロイトは見ている。

50 「両者は結婚に幻想を抱いていた分だけ哀れなものとなって、性欲動を支配し他に逸らす能力に新たに頼ることになる。比較的成熟した年齢の男性がこうした課題をどの程度こなせるか、それはここで論じることではない。経験によれば、男性は、ただ暗黙の内に不承不承なされることではあるが、最も厳格な性的秩序からでも一片の性的自由を与えられ、それを非常に頻繁に利用している。我々の社会で男性に対して通用している「二重の」性道徳は、規則を定めた社会自体がその実行可能性を信じていないことを自白した最たるものである。しかし経験はまた次のことも教えている。女性は、人間の性的関心の本来の担い手として、欲動を昇華する才を少ない規模でしか与えられていない。また、女性には性的対象の代替物として確かに乳児がいるが、成長過程の子供となるとその役割を果たすのに十分ではなくなる。その結果、これが私の主張であるが、結婚に幻滅して女性は、生活を持続的に暗くする重い神経症にかかるのである 。今日の文化的条件の下では、結婚はとっくに、女性の神経失調の病に対する万能薬ではなくなっている。我々医者は、そうした場合でも依然としてなお結婚を勧めているが、しかし我々は、結婚に「耐える」には逆に女性はきわめて健康でなければならない、ということを承知している。そして、我々のところにくる男性の相談者には、結婚前にすでに神経失調の女性を妻に迎えることはしないよう強く忠告している。」(S.157f.)

51 「二十歳をはるかに超える禁欲は、若い男性にとってもはや案ずるに足りないことではないし、たとえ神経失調には到らなくても、別の障害に行き着くことになる。確かに、強力な欲動との戦いや、その戦いの際に必要となる、心の生活におけるあらゆる倫理的・審美的な力の重視が、性格を「鍛える」のだと言われる。そしてこれは、きわめて好ましい内的体制を有する幾らかの人には正しい。我々の時代に個々の性格がこれほど著しく分化したのは、性的な制限によって初めて可能となったことだ、という点も認めてよい。しかし、それをはるかに上回る大多数の事例では、官能性との戦いによって、性格が自由にできるエネルギーは使い尽くされてしまう。社会に参画して居場所を得るのに、若い男性が全力を尽くす時期にはまさにそうである。昇華の可能性と性的活動の必要性との関係は、当然のことながら、個々の人間に関しても、さらには様々な職業の種類に関しても、大いに揺れがある。・・・一般に私は、性の上での禁欲が、エネルギッシュな自主独立の活動家や、独創的な思想家や、型破りな解放者・改革者を育て上げるのに助けになっている、という印象を受けていない。おとなしい弱虫を育てることの方が、それよりもはるかに多く、彼らはその後大衆のなかに埋没してしまう。大衆は、強い個人によって与えられた刺激にしぶしぶ付き従うのが常である。」(S.159f.);「特にはっきりと捉えられるのが、結婚までの禁欲を厳しく求めることによって女性の本質に呼び起こされる害である。教育は、若い女性の官能性を結婚まで抑え込むという課題を引き受けている。それはもちろん容易な課題ではない。というのも、教育は非常に厳格な手段を使って仕事をするからである。・・・その結果、若い女性が恋愛を両親の権威によって突然許された時には、心的な活動をうまく成り立たせることができず、自らの感情に自信がもてないまま結婚していくのである。恋愛感情が機能するのを人為的に遅らせてきたために、願望のすべてを妻のために残しておいた夫に対してこの女性たちが与えることができるのは、失望だけである。心のなかの感情という点では、この女性たちはまだ両親を信奉していて、両親の権威が性的な抑え込みをもたらしている。」(S.160f.)

52 「教育は、もともと大いに好奇心をもっている性的な問題に女性たちが理知的に取り組むことを拒み、そのような好奇心は女性らしくなく罪深い性向の徴だという批判でもって女性たちを脅かす。それに

よって女性たちは思考そのものについて抑止を受け、女性にとっての知の価値が切り下げられる。思考の禁止は性的な領域を超えて広がるが、それは一部には、諸領域がどうしても連関していることの結果であり、また一部には、男性の場合の宗教的な思考禁止やおとなしい臣下の忠誠とまったく同じように、自動的に拡散したものでもある。メビウスが数多く批判を受けた著作のなかで述べたように 、知的な仕事と性的活動との生物学的な対立が女性の「生理学的な精神薄弱」を説明する、という風には私は考えていない。その逆で、非常に多くの女性たちが知的に劣っているという疑い得ない事実は、性的な抑え込みに必要となる思考の抑制に帰せられる、というのが私の意見である。」(S.162)

[53] その後にフロイトはこう書き添えている。「それは特に、快楽主義から十分解放されていないために、一定規模の個人的な幸福の充足を我々の文化的発展の目標のなかに拾い上げることができないでいる場合に問題になる。」(S.167)

[54] Sigmund Freud: Das Interesse an der Psychoanalyse, 1913 in: Gesammelte Werke, Bd. 8, S.415f.

[55] Sigmund Freud: Die Zukunft einer Illusion, 1927 in: Gesammelte Werke, Bd. 14,S.356

[56] エレンベルガーもこれに類することを述べている。アンリ・エレンベルガー『無意識の発見　上』、1980 年、328 頁。「高貴な野蛮人」の表象と弁神論、社会契約論との関係については、福田覚「啓蒙の構図の中の新大陸像――18 世紀ドイツ文学におけるアメリカ」、『言語文化研究』(大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科) 23 号、1997 年を参照のこと。

[57] 先に 2-2 で引用した文章が示唆的である。「私たちの文化は、まったく一般的に言って、欲動の抑え込みの上に築かれている。個々の人々は、自らの財産、自らの絶対的権力、自らの人格の攻撃的傾向や報復傾向からその一部を譲り渡した。こうした貢献があってそこから、物質的な財においても精神的な財においても、共有の文化財産が生じてきたのである。」(S.149)